



Contents

- ・【巻頭エッセー】 名著の言葉～完全なるもの～…加納悦子 ●表紙
- ・ Library Data 2016 ●2～5
- ・ 館長室へようこそ ㊤ …古川 聡 / 雑誌の部屋 ㊤ ●6
- ・ 【私のおすすめ】 …横屋 藍 澤幡優希 ●7
- ・ Information ●8

Parlando

ぱるらんど

「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No.295

【巻頭エッセー】 名著の言葉～完全なるもの～

加納 悦子

自分が何のために音楽するのかというと、「音楽を奏でる」と、それだけで「生きている」気持ちがあるので、音楽とは、よく言われるように自分でやっている自分へのセラピーとも言えます。だから止められないのかもしれませんが。

演奏会で演奏することはそれとは少し違います。プロの演奏家ならば仕事として成立しなければならないという条件もつきますが、それよりも、鑑賞している方々がいます。もし、自分の演奏と聴く方の感想がピタリと合っていれば、これに勝る喜びはありません。しかし、そのために音楽するのかというと、これも真実ではない気がします。

国立音大バッハプロジェクトの集大成として、2009年に学生と教員、プロのバロック楽器奏者で「口短調ミサ」全曲を演奏したときの記憶が生々しく蘇ります。

普段私が口短調ミサを歌うときに合唱は歌いませんが、このときはプロジェクト監督の磯山雅先生の提唱で、少人数編成の合唱隊の中からソロを出す、つまり、ソリストも合唱パートを全部歌うという、大変興味深い、歌手にとっては過酷な演奏手段を経験しました。皆様もご存じかもしれませんが、バッハの合唱は大変難しい。息継ぎをする暇もない細かな旋律が延々と続いて疲労困憊となったところで、そのときは私や他のソリストはソロ曲も歌わなければなりません。しかし、ひたすらバッハの音を追い駆けていく演奏会本番で、その場に居合わせた全員が一緒に

味わった正に忘我の時間、音楽が自分らの身体を通して高みに飛翔していく感覚は忘れがたいものがあります。いっぽう、それは大変に衝撃的な体験でしたので、もしかすると、あまりに一生懸命演奏したために見た幻覚、あるいは集団ヒステリーかもしれないなどと納得してみたのです。

しかし最近、アルベルト・シュヴァイツァー博士の有名な著作の一つ『バッハ』の中の「音楽におけるほど、完全なるもの—それに出会えば不完全なるものは消え失せざるをえない—」という言葉が厳格に支配するところはない。…音楽は見えざる世界の映像である。この世界は、それを完全な姿で観じ、再現をするすべを知る人々によってしか、永遠的に音のなかに確保されることはできないのである。」(白水社・シュヴァイツァー著作集)という一節を改めて読む機会があった折、あの時の「口短調ミサ」の演奏が生々しく記憶から起き上がってきました。つまり、私たちはあの演奏で「完全なるもの」を見たのではないのか？ また、それと同時に、自分の疑問への答えとして少し言い換えるならば「演奏する者は自らのためでもなく、他者のためでもない完全なるものの音楽に奉仕することがある」という気付きに、この名著の言葉との邂逅をもって、ようやく少し辿り着いたと思っています。

●かのう えつこ 本学教授(声楽)

*「バッハ 上～下」浅井真男[ほか]訳『シュヴァイツァー著作集 12～14』白水社 1957～1972 請求記号●J23-449,J30-036～037